

育てる者を育てる「保育者養成」の課題

——自我の成長という観点から——

塚田 幸子

はじめに

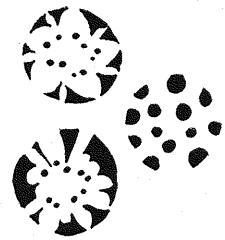
ある年度に発足した保育者養成課程において、前期を終えた五か月足らずの段階で振り返った考察がある。新しい養成課程の教員たちにとって、学生たちとの出会いは驚きと発見の連続であった。

入学式、オリエンテーション、授業開始

入学式で学生たちと初めて出会うことになった教師

たちが最も驚いたことは、保育者養成課程の学生たちが、他学科の学生たちと比べて、入学式やオリエンテーションで著しく私語が多いことだった。学生たちは何度も多数の教師から注意叱責を受けるが、一向に静かにならなかった。このことで授業が始まってから教師たちは悪戦苦闘することになる。その過程で教師たちが、指導法をめぐって話し合いを重ねていくのだが、教師全員で会議を開くこともあれば、二、三人でその都度気づいたことを互いに話し合ったり、相談し

たりということが、中学や高校の職員室でのようにして積み重ねられていった。養成校では教師が学生と触れあう時間が少ないため、一人ひとり



の学生について多面的な理解を得ることは困難があるが、筆者はチームとして教師たちと話しあう過程で自分自身の中に形成されていった学生観を自覚し、意識するようになっていった。

入学式直後から、学生たちの髪型（髪の色を含めて）、化粧、服装、まなざし、顔の表情、言葉遣い、姿勢や歩き方、態度は、全員ではないものの、保育者をめざす学生のものとは思えないほど過激で挑発（挑戦）的なものがあると教師たちは認識した。学生との出会いの印象は教師にとって決して良いといえるものではなかった。教師たちは筆者を含めて全員が自信と希望を失い、不安と絶望にとらわれそうになるのを辛うじて耐えていた。困難に遭遇しても何とかそれを持

ちこたえる力というのは大人の「大人性」と言える（注1）。また、津守真はこれを育てる者の「自我」の力（注2）と言っている。しかし、この「自我」という言葉は自分勝手という意味での「わがまま」という言葉と結びつきやすいために、全く逆の意味にとられることが一般の人々の中には多く見られるという弊害がある。今後の課題として新しい言葉が必要なのではないかと考え始めてはいるが、とりあえず、ここでは自我という言葉を使うことにする。

入学当初、学生たちが発していたメッセージは、明らかに教師たち、ひいては大人、社会全般に対する不信であったと言つてよいだろう。そこで教師を絶望が支配すれば、教育（「保育」と言い換えてもよい）の基盤が崩壊する。筆者は乳幼児（障碍をもつ子どもや、いわゆる問題行動をとる子どもを含めて）の保育を実践研究してきた過去の経験に立ち戻り、また、自分の子どもたち（現在はすでに成人して職業に就いている）を育てた経験に立ち戻り、外見に現れた姿、形

ではなく、学生たちの中に子どもを見出す必要を認識していった。十八歳の学生は身体の形や大きさから言えば大人そのものだから、つい、大人として厳しい基準を要求することになることも避けられない。厳しい指導をしなければならぬという意見を主張する一部の教師たちの声は筆者自身の内なる声と重なっていた。というより、自分自身の迷いや不安でもあった。

つぶやくように愚痴をこぼす声も同じで、自分の声の外に現れて対話をしている、つまり、思考しているといても過言ではなかったのだ。そういう意味で、教師陣は一人の人格のように機能していたのだと考えることができる。そして、このことも筆者は自我の働きと捉える。

学生の中に「子ども」を見出すということは、学生を子ども扱いすることとは違う。どんなに幼い子どもでも、子ども扱いされることを望んだり喜んだりはしないものだ。では、どうするのかというと、ひとつは学生たちを我が子と同じように見る、あるいは自分自

身の学生時代に重ねあわせてみるという方法がある。筆者の場合、比較的容易にこの方法を用いることができた。自分自身が学生だった頃、保育を学んでいた筆者は、まだ十八歳でしかないのに、教師から同じ成熟した大人としての様々な振る舞いや見方を保育者として要求されることが重荷に感じられてとまどったことも忘れずにいる。自分の中にある未熟な子どもっぽいものを認めて少し猶予を与えてほしいと内心思っていたという記憶だ。

また、つい数年前まで学生だった自分の娘たちに話を聞いてもらったところ、昔は結構突っ張っていた娘が自分自身の当時の気持ちをさらりと言葉で解説することができるようになっていて、学生の気持ちを代弁する結果となつて筆者を驚かせた。学生の見方や感じ方に寄り添うような教師側の見方が成立する上で大いに助けられたのだった。

こうして、筆者の学生観が形成され変容していくのと同時に他の教師たちそれぞれが、やはり似たような

経過をたどって、それぞれの学生観を作り上げていったことは非公式なお互いの報告や話しあいでも確認されていった。学生に対する肯定的な見方が強められたり、逆に危機に瀕したりすることが以下の行事を契機として生じていった。

体育祭

学生たちにとっても教師たちにとっても、体育祭は保育者養成課程の一員であるという共同の意識を高め、一人ひとりが個人として互いに能力や持ち味を認め、認められるという絶好の機会となった。文字通り、身体行為を通して、学生も教師もあちこちで様々なかかわりを持つ機会を得ることとなったのだ。学生たちは実に応援しがいのある真剣さで積極的に各種競技に参加していた。応援する教師も笑顔で大きな声と身振りで一人ひとりに期待し肯定しているメッセージを熱心に送り続けた。これは「保育」という人を育てる行為、営みそのものを教師たちが学生に対して実践

してみせたものだと思えることができる。少なくとも筆者自身はそのことを自覚しながら行っていた。そして、大半の教師が自覚的に行っていたと言えるだろう。

乳幼児の保育では、例えば一歳児たちが、誰か一人が走り始めるや、その後にはほぼ全員がついて走り回り、渦のようになって喜びがわき上がるという現象があり、報告もされている。子どもたちは一番を競うものでなく、勝ち負けを競うのでもなく、自分の身体が自分の思い通りに動かせるという「能動性」(注3)の喜びを、そういう全く個人的な喜びを共同のものにして、更に大きな喜びを味わっているのだと言うことができる。ここには古代から人間の共同体に普遍的に見られる「祭り」の根源的な姿を見ることができだろう。日本の運動会(体育祭)は諸外国では見られない独特なもので、子どものみならず、地域の人々も参加するなど、地域共同体の祭りとして受け継がれてきている。

体育祭で張り切って、思い切り身体を動かした学生の中に、教師たちは右記の一歳児のような「子ども」を見出すことができたのだ。教師たちがそれぞれに発見した学生の中の「子ども」、言い換えれば、輝く美しい「生命性」（注4）を互いに報告、確認し、共有していくことは容易になし得ることだった。ここでは大きな努力もなしに、意識的に話しあう努力もなしに、自然にわき上がる喜びとして、互いに学生の良さを語りあうことができたのだ。それでも、これはまだ始まりのうちに過ぎなかった。

夏のキャンプ

学生たちは体育祭で力を出し、自分たちの存在が認められ確かなものになる体験、つまり、「自我」が強められる体験を通して安心して教師を信頼し、相談に訪れるような変化が見られるようになってきた。講義や実習、行事についての疑問や不安を、また、できつつあった友人関係の悩みなどを打ち明けるようになって

ていった。体育祭とは違って泊まりがけのキャンプでは、誰もが何らかの不安や悩みを抱えて当然といえは当然のことだった。また、他の養成校との比較でカリキュラム構成についても率直な意見をぶつけてきている。果たして自分たちに保育者としての実力が身につくのだろうかという不安だった。

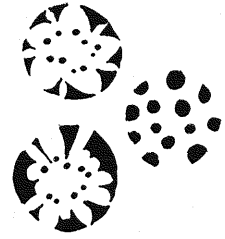
教師たちは真剣に誠実に学生の相談に答えていく努力を続けた。講義や実習などの授業を通して知識や理念、技術についてはもちろん、それぞれの専門で精一杯伝えていく努力を続けた。

教師たちの励ましもあって、キャンプには全員が参加し、一、二名病人が出たりはしたものの担任教師の献身的看病もあり、学生たちは大きな関門も通過していった。

前期末試験

七月初旬のキャンプが終わってから七月末の試験で前期が実質的に終了するまでの短い期間は、学生に

とつても教師にとつても最も長く感じられるような辛い時期だった。教師側から見ると、初めて学生を受け入れることになった保育者養成過程



の教師たちの方が互いに不安と緊張を口に出すほどだった。

試験というものは、課される学生が習得した知識や能力を試されるという側面と、教師が自らの指導力の成果を問われる側面を併せ持つ両義的なものであることは、教育者を自認する者にとつて当たり前の重い事実だ。その重責から逃れたい衝動を教師たちは抱えていた。

試験を実施してみると、試験に取り組む学生たちの真剣な面持ちと気迫に筆者は驚きを禁じ得なかった。その姿勢は当然成績にも反映してくるものだ。学生の成績は予想以上によいもので筆者は再度驚かされたのだ。後は、試験に取り組む真剣な姿勢が少しでも通常

の講義や演習においても発揮されて、継続的な態度として実っていくことを期待し、励ましていくことが課題となってくる。

まとめとして

前期を通じて学生たちの出席率は驚異的な高さだった。全員出席という日が何日も何日も続いた。教師たちも一様にその事実を驚きと喜びをもつて語りあった。キャンプを境に怪我や病気など体調を崩す学生もちらほら現れ始めたものの、出席状況は試験に至っては一〇〇パーセントという素晴らしさだった。これほど真面目に出席しているという事実が語っているもの、それは、学生たちの「保育者になりたい」という熱い思いに他ならないと筆者は考えた。いや、むしろ、他の教師たちとの語りあいの中で気づかされ、考えが共有されて、共通の認識となっていくものだと言った方が適切だろう。こうして、学生の発しているメッセージを教師が読みとる努力をし、気づいたこと

を互いの対話を通じて確認しあうことで、教師たちの「自我」が育ち、育てられ、強めあっていたことが分かる。「自我」は便宜的な名称で実態があるわけではない。人と人とが織りなすかわりあいという機能こそが「自我」なのだ。

ここで、平成十五年度全国保育士養成セミナー分科会で東京教育専門学校の杉本太平が発表したときの言葉を引用するが、それは、筆者が繰り返し他の教師たちと互いの考えや感じ取ったことを話しあい、また、自分自身との内的対話を通じて確かなものにしていった考えと共通のものがあつたからだ。その言葉は「学生は入学時からすでによい保育者になろうとしている存在である」というものだ。こうして言葉にしてみると「なんだ、当たり前ではないか」と思う人と、「どう見ても保育者をめざしているようには見えない学生もいるのではないか」と思う人に反応は分かれるだろう。というより、筆者を含めて教師たち全員が、この二つの考えの間を振り子の針のように揺れ動き続けた

前期だったと言った方がよいだろう。学生を早く保育者にふさわしい姿に変えたいと強く願うあまり、目の前の学生のありのままが見えなくなってしまうようになる危機が何度もあつたことは事実だからだ。

E・H・エリクソンは乳児期に獲得する大切なものとして「基本的信頼」(注5)をあげている。保育者(母親を含めて)は子どもの中に人間というものに対する基本的信頼を育てることを目標にして努力を続ける。乳幼児の保育では実践できていたことが、学生に對してもできなければ、これまでに獲得してきたものが崩壊してしまうという危機感を筆者は感じていた。入学当初、学生たちは前述したように、あらゆる角度から、大人というものへの不信を表明していた。学生から信頼される教師になるためには、まず、教師自身が自分の考え方や見方を変えなければならぬと考えたのだ。全面的で無条件の信頼を自分から示すことができなければ、学生たちが発しているメッセージ、大人(親や教師)への不信を解くことはできないのでは

ないかと考え、基本的信頼の相互性を認識したのだ。

自我、つまり、「私が他ならぬ私である」という意識は、近年の脳神経科学の研究成果を待つまでもなく、論理的に他者との関係の上にか成立し得ないので、他者（保育者、教師）とのかかわりを通して育まれる、生き生きとダイナミックな過程であるということが出来る。相手に変わってほしいと思うのなら、自分の見方を変えることで相手が変わって見えてくるはずだ。筆者は何度も子どもとの間でそういう見え方の変化を体験している。

子どもを育てること（保育）は、子どもを産めば当然、たとえ子どもを産んだことがなくても誰にでもできること、本能のようなものだといふ過小評価や偏見が、現代においても、いや、現代だからこそ、はびこっている。本来、子どもを産み育てる営みは、ただ一人だけで行うものでもなく、家庭内だけで、閉じられた空間だけでなし得るものでもないといふことは、長い人類の歴史を振り返ってみるまでもなく、実は容

易に気づくことだ。子どもは何人も大人や子どものいる共同体の中でこそ、健やかに育つように生まれてくるのだといふことを強調しておきたいと思う。そして、その共同体の成員同士は、時には利害が衝突したり、考え方が割れることがあっても、お互いがお互いを大切に思い信頼しあうことから、平和的な手段で調整する知恵を出しあって危機を乗り越えていく、辛抱強さ、誠実な生き方を、身をもって示すことで子どもを育てていくのでなければならぬ。

この時点でも確実な成果として、学生たちの目には柔らかで優しい光が宿り、表情には自信に裏付けられ落ち着いた美しさや素直なかわいらしさが日増しに現れてきていることを教師たちは喜び、互いに確認しあうことができた。ゆとりをもって目を合わせ、元気ではつらとした挨拶を学生の方からしてくるのは言うまでもない。若さゆえにもっている学生本来の生命的な美しさを、毎日の学生にも新たに発見できることほど教師たちにとって嬉しいことはない。

学生の自我形成と成長を助けることは教師の役目なのだが、本稿では教師の中に育つ自我に焦点を当てて考察を試みた。本来的には学生の中に、あるいは教師の中に、というより、学生と教師双方の関係のありようそのものが自我と云うべきなのだが、理解を容易にするために一方に比重を置いた考察とした。

右記は、学生たちとの出会いから約半年が経過したに過ぎない時点での考察に多少の修正を加えたものだが、その後もこれを覆すような事態には至っていない。渦中にあるからこそできた考察でもあることを付記しておこう。
(昭和学院短期大学)

注

1 大人性 浜口順子 日本保育学会第五十三回大会研究発表論文集三一五 『保育における「大人性」と「権威」につ

SM11000

2 自我 津守真著 『自我の芽生え』 岩波書店 一九八四

四頁「次第に明瞭に意識されてきた外界と内界とを組織づける最初の体験の時期……すなわち、一人の人間としての自我の力がつくられる時期」

同書 八頁「自分の世界の意識の側面である自我」

同書 九頁「自らの初体験を位置づけ、組織し、統合する自

我」

E・H・エリクソン著 仁科弥生訳『幼児期と社会Ⅰ』み

すず書房 一九七七 三頁 初版の前書き「自我とは人間の

経験や活動を環境に適応する行動に統合する能力を意味する

概念である」

3 能動性 津守真著 『保育者の地平』 ミネルヴァ書房

一九九七

4 生命性 津守真著 『保育者の地平』 ミネルヴァ書房

一九九七

5 基本的信頼 E・H・エリクソン著 仁科弥生訳『幼児

期と社会Ⅰ』みすず書房 一九七七